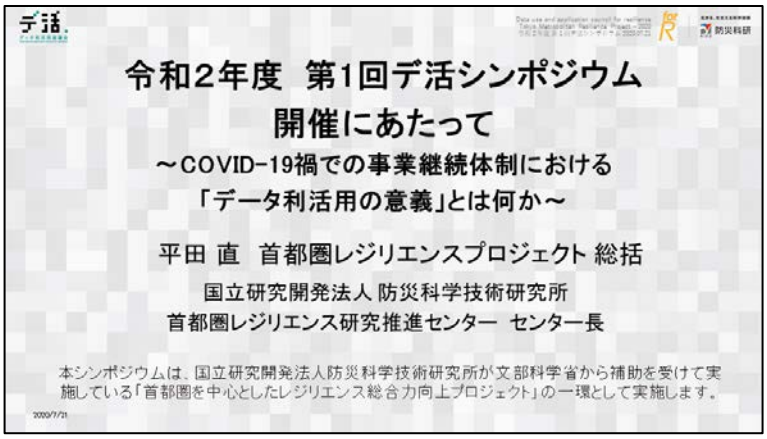
**あいさつ**

**平田　直（防災科学技術研究所 首都圏レジリエンスプロジェクト 総括 /**
**首都圏レジリエンス研究推進センター センター長）**

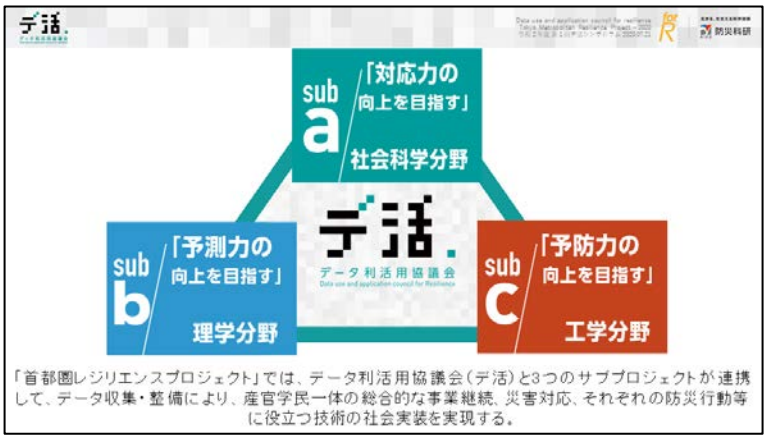
## 1.本プロジェクトの概要

改めまして、本日のデ活の主催者を代表して、国立研究開発法人 防災科学技術研究所 首都圏レジリエンス研究推進センター長の平田から、ごあいさつさせていただきます。本日は令和 2 年度第 1 回データ利活用協議会のシンポジウムを開催します（図表 1)。このシンポジウムは、文部科学省の補助を受けて、防災科学技術研究所が 5 カ年の計画で 2017 年度から始めているものです。正式名称は「首都圏を中心としたレジリエンス総合力向上プロジェクト」ですが、長いので「首都圏レジリエンスプロジェクト」と言わせていただきます。

このプロジェクトは、三つのサブプロジェクトとデータ利活用協議会の四つで成り立っています（図表 2)。対応力の向上を目指す社会科学分野のサブプロジェクト（a)、予測力の向上を目指す理学分野のサブプロジェクト（b)、予防力の向上を目指す工学分野のサブプロジェクト（c）が連携し、産学官民が一体となっ




1



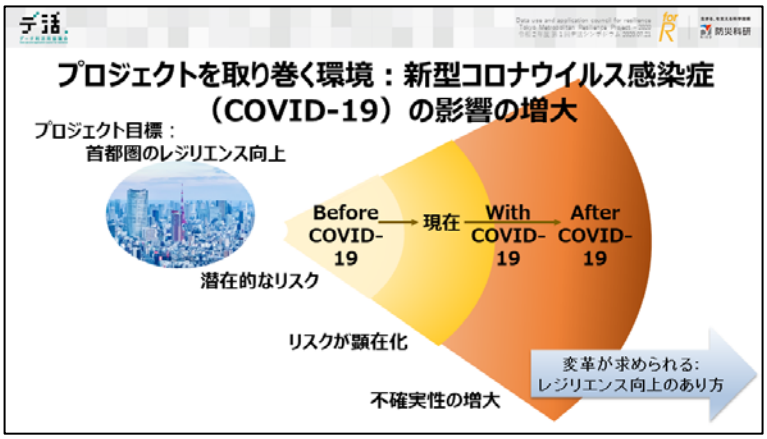

2

た総合的なプロジェクトとして、事業継続、災害対応力、個人の防災行動の向上、つまりレジリエンス総合力を向上させる技術の研究・開発を進めています。

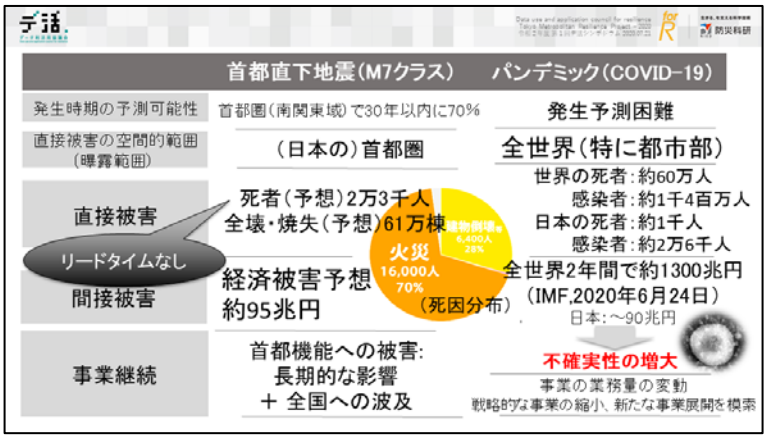
## 2.プロジェクトを取り巻く環境

私たちを取り巻く環境は、2020 年になってから大きく変わりました。厳密には 2019 年の暮れから、世界では COVID-19（新型コロナウイルス感染症）が徐々に広がり始めました（図表 3）。ビフォーCOVID-19 の時代にも、もちろん世界で感染症などが起こる潜在的なリスクはありましたが、2020 年になってこのリスクが顕在化し、現在、不確実性の増大ということが、われわれの社会を取り巻く最も大きな現象になっています。

私たちは豪雨や台風災害についても研究を進めていますが、元々は、主として首都直下地震をターゲットに研究をしていました。首都直下地震と、もはやパンデミックとなってしまった COVID-19 を比較してみると、細かいことはさておき、いずれも大きな被害を社会にもたらしています（図表 4）。首都直下地震の最悪のシナリオでは、死者は 2 万人以上、全壊・焼失建物は 61 万棟を超え、経済損失も約 95 兆円と考えられています。




3

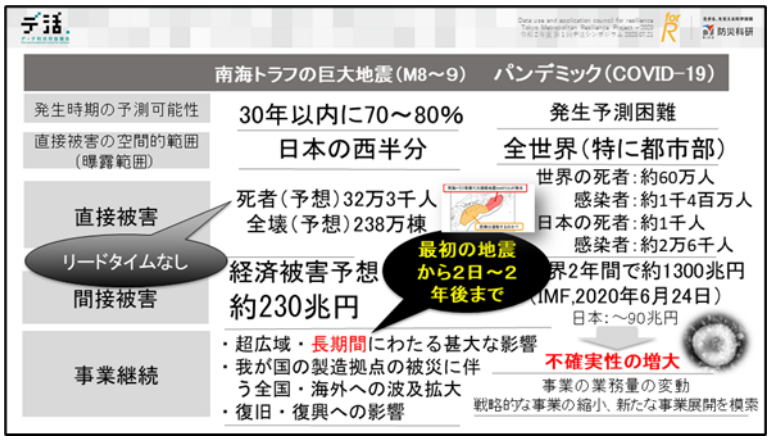



4

一方、COVID-19 では、全世界で 60 万人の方が亡くなり、日本でも死者が 1000 人を超えました。わが国の経済損失は約 90 兆円と、首都直下地震と同じような経済的損失があるといわれています。しかし、まだ進行中の災害であり、この先どうなるかはよく分かっていません。

同じように、大きな災害が及ぼされると考えられている南海トラフ巨大地震とも比較してみます（図表 5）。南海トラフ巨大地震が起きると、首都直下地震の約 10 倍の死者、約 10 倍の物的被害が予想されています。経済損失も倍以上で 200 兆円を超え、国家予算 2 年分以上の大きな災害になると考えられています。

南海トラフ巨大地震も首都直下地震も、いつ起きるかをあらかじめ予測することは非常に困難です。私たちが生きているうちに大きな地震が起きて大災害になることはほぼ間違いありませんが、いつ起きるかは分かりません。南海トラフの地震は非常に大きいので、一度大きな地震が起きると、もう一度大きな地震が起きる可能性が高くなりますが、その次の地震が 2 日後なのか、2 年後なのか、はたまた 10 年後なのかのよく分かりません。これは COVID-19 の不確実性と非常によく似ていると考えられています。

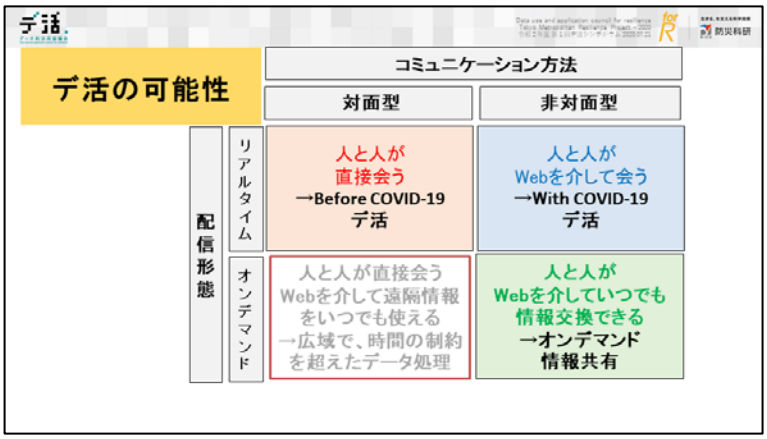


5

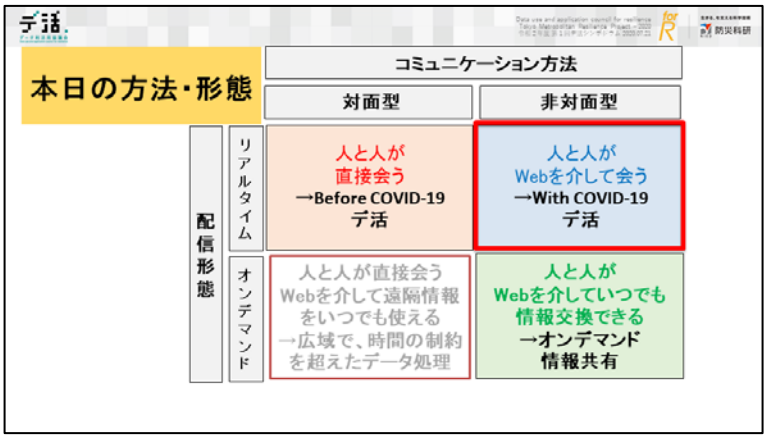
## 3.コミュニケーション手法の変革

ビフォーCOVID-19 のデ活の活動では、私たちのコミュニケーションの手法として、人と人が直接会って情報を交換し、意思決定するような対面型の方法があ

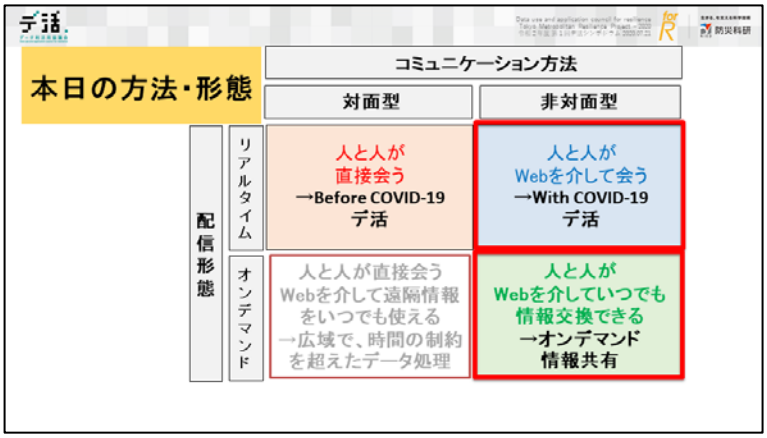
りました（図表 6）。しかし、今は直接会うことなく、人と人が Web を介して情報を交換することができるようになってきました（図表 7）。さらに、リアルタイムだけではなく、オンデマンド方式で、過去のデータを取り出すことができるということも進めていきたいと思っています（図表 8）。私たちへの COVID-19 の影響は長く続く可能性がありますが、アフターCOVID-19 では、ハイブリッド方式で、人と人が直接会って情報交換し、意思決定するだけではなく、遠隔の人々と




6

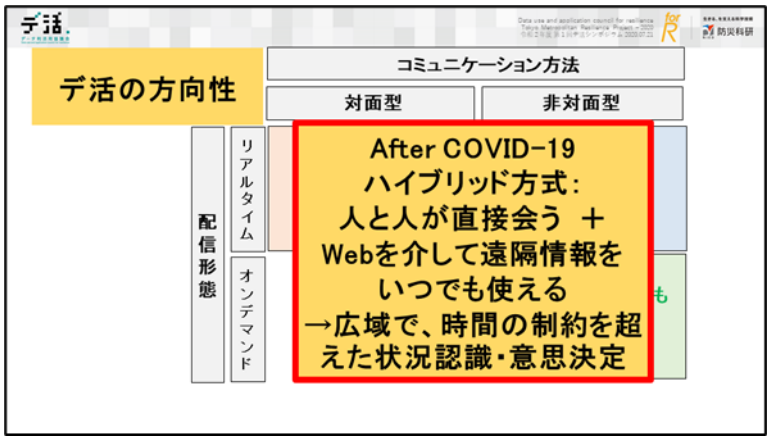



7




8

Web を介して広い状況認識や意思決定をすることができるのではないかと考えています（図表 9）。




9

本日のオンラインのデ活シンポジウムを、このような将来を見据えて自然災害等さまざまな災害に私たちが取り組んでいくきっかけの一つにしていきたいと思います。仕組みが複雑で、慣れないこともありますが、最後まで皆さんと有益な議論ができることを期待していますので、よろしくお願いします。

（司会：下村）　COVID-19 も一つの感染症災害です。このような災害が起きたときに、それにすぐに対応し、完璧でなくても、できる範囲のことをしていくことこそがレジリエントですから、どんどん対応していけばいいと思います。

このシンポジウムは災害がテーマなので、他のシンポジウム以上に、オンラインの形を試みること自体が一つのコンテンツと言えます。このシンポジウムの終了後、どのような不都合があったかということを、ご覧になっている皆さんからもフィードバックしていただき、次のことを考えていきたいと思います。実際に災害が起これば、直に会っていられませんから、いろいろな非対面の形で連絡を取り合うことになるでしょう。今日は、その手探りの大きな一歩になればと思います。